

平成 26 年度ユネスコスクール年次報告書

報告期間：2014年4月～2015年3月

※今年度の年次報告書は担当者の名前、メールアドレス、添付資料を除き、HP等で公表します。また、ユネスコスクールの質の確保の観点から、報告書の内容が一定の基準に満たないもの、報告書が2年連続して未提出の場合には、ユネスコスクールの認定取消を勧告させていただくことがありますので、あらかじめご了承ください。

1. 学校概要

学校名 宮城県気仙沼西高等学校
 種別 保育園・幼稚園 小学校 小中一貫教育
 中学校 高等学校 中等教育学校
 教員養成 技術/職業教育
 その他 ()
 住所 〒988-0044
宮城県気仙沼市赤岩牧沢155-1
 E-mail : chief@knisi-h.myswan.ne.jp
 Website : http://www.knisi-h.myswan.ne.jp
 児童生徒数：男子 88名 女子 264名 合計 352名
 児童・生徒の年齢 16歳～18歳

2. 担当者 ※公表しません

3. 実施活動（複数選択可）

- 地球規模の問題に対する国連システムの理解
- 国際理解
- 世界遺産
- 平和・人権
- 環境
- 気候変動
- 生物多様性
- エネルギー
- 防災
- 食育
- 伝統文化
- そのほか (福祉)


4. 活動内容

(1) 1年間の主な活動内容について記載願います。

別紙の通り

(2) 活動時間について（下記から選択して下さい。）

- 通常の授業時間を使用（総合的な学習の時間を含む）
- 時間外活動の時間を使用
- ユネスコクラブの活動として実施
- その他（)

学校名	気仙沼西高校	主なESD領域	環境・福祉・地域交流
テーマ	東日本大震災以降のESD教育事業を復活させる取り組み ～理科巡検を実施する取り組み～		
<p>1 本校のESDでめざすもの</p> <p>(1) ESDのねらい 理科行事や福祉施設との交流活動などの実践をとおして、自然環境や福祉、地域との関わりについて学ぶ。</p> <p>(2) ESDで育てたい資質・能力 東日本大震災により地震や津波の被害を受けて自然災害の怖さが強調されているが、本来気仙沼は自然と人間が上手に向かい合って共存し、発展してきた町である。改めて自然を見つめてその成り立ちや偉大さを科学的にとらえることができる視点をもった生徒を育みたい。また、本校の福祉教育に関するカリキュラムやキャリア教育の成果を生かし地域社会との交流をとおして、協調性や共生など、人としての基本的な生きる力を育みたい。</p> <p>2 今年度のESDの概要</p> <p>(1) 実践の概要 震災以降、実施を見送っていた理科巡検を、4年ぶりに復活させた。また、天体観測はこれまでの形態を踏襲し実施した（当日、天候不順により望遠鏡による実際の観測は中止した）。</p> <p>平成26年度にESD実践したプログラム</p> <p>I 理科巡検 ～三陸ジオパーク（唐桑・大船渡）を巡検する～</p> <p>日時 平成26年7月1日（火）、3日（木）、8日（火） 方面 大船渡市立博物館およびその周辺、唐桑半島ビジターセンター、御崎遊歩道 対象 本校1年生全員 内容 1) 大船渡市立博物館の展示物見学および周辺環境の植物や地形を見学 ①館内見学の際に学芸員から解説を受ける ②化石や堆積物を見学し三陸および日本の誕生の歴史を考える 2) 唐桑半島ビジターセンターの展示物見学および周辺環境の植物群生や地形を見学 ①東日本大震災の写真見学 ②津波発生のメカニズムを考える ③地層の見方</p> <p>II 天体観測をとおして気仙沼の自然を考える ～スペースウォッチングを通じて地域を理解する～</p> <p>日時 平成26年12月3日（水） 会場 宮城県気仙沼西高等学校 対象 本校3学年の希望者 内容 1) スライド上映、星空解説 ①冬の星座（スライド） ②星空解説 ③観測天体についての説明 2) 天体観測（屋上天体ドーム）</p>			
			
【気仙沼支援学校との交流会の様子】			

Ⅲ 福祉教育・・・地元福祉施設との交流

1) 交流会等の実施（福祉類型）

- ・ デイサービスセンターとの交流会（本校会場）
- ・ 気仙沼支援学校との交流会（6回程度）
- ・ 知的障がい者授産施設見学

2) ボランティア活動（社会福祉部ほか）

- ・ 児童・障がい者・高齢者施設でのボランティア活動
- ・ 各施設の行事等でのレクリエーションの企画・実施
- ・ 施設との年間を通しての交流
- ・ 生徒会による学校周辺地域の清掃活動



【デイサービスの交流会の様子】

- ・ 部活動単位による校内および学校周辺地域の清掃活動

(2) 今年度、特に工夫・改善したこと

東日本大震災後、野外活動型のプログラムは実施に当たって危機管理の体制を十分に整えることとした。観察地は海岸地帯が主であり、環境変化を現地で調査し、安全面で支障のないことを確かめてから計画にあたった。行事实施の決定後は、内容面で理科巡検は「海と人の関わり」が観点の一つとなっているため、被災を体験した生徒たちの心理的負担を考慮した。実施運営に際してそれらの諸問題を克服できるように計画から実施まで、細部にわたり多様な角度から検討し、運営にあたった。

3 「国連・10年」を振り返っての成果と課題

(1) ねらい、および学習内容（活動プログラム）の視点から

①成果 開校以来、理科教育の応用として取り組んできた環境教育において、地域の自然環境を科学的に理解する学習の場として自己の地域との関わり、自然や地域特性を認識できるようになった。

②課題 震災以前は2年間にわたり南北2地域の理科巡検を実施してきたが、南部については環境の風化浸食、復興事業による消滅をうけて実施を見送り、北部のみの実施になっている。しかし、自然環境の特質を理解するためには、今後も野外での学習機会をできる限り確保することが望ましい。

(2) 指導計画、および指導体制、指導方法の視点から

①成果 生徒は事前学習を行い巡検に臨んでいる。実施後は記録の整理、研修内容を以降の学習内容に関連づけて興味関心をもち取り組んでいる。また、災害時の安全確保や団体行動の指導等についても、研修の機会として効果的である。理科の教員を中心として実施してきたが、実施学年が中心となって運営されるようになるなど、徐々にではあるが全体的な理解協力が得られるようになってきた。

②課題 高校の現場では、まだまだEDSに対する理解が十分に得られていない。様々な角度から、現場教職員へのアプローチの機会が求められる。また、本校は平成30年度に気仙沼高校と統合予定である。これまでの成果をおさえながら、統合に伴い両校の指導内容の調整が必要になってくる。

(3) 育てたい資質・能力に対する児童生徒の変容、評価の視点から

①成果 震災後、野外での活動・機会が減少している地域の生徒にとって、世界的に貴重な地元の自然を再認識する機会として、理科巡検は貴重な役割を果たしている。また、福祉活動を担う福祉類型と社会福祉部に加え生徒会が同様の意識をもち活動を活発化させている。これらより地域理解、協調性や共生についての理解・視点が養われて

いると思われる。

- ②課題 情報機器が普及している現在、生徒の興味関心の対象が変容しているため、意図して実際の自然の素晴らしさにふれさせ、感動を味わう機会をいかに提供できるかが大切である。また、そのような生徒に対して指導する教員の教授力を高める機会を設けていく必要があると思われる。

4 今後 ESD の方向性

～主体的・探求的・協働的な学習の充実、アクティブ・ラーニングの推進等～

(1) ねらい、および学習内容（活動プログラム）の視点から

教育課程における確固な位置付けにより、学習内容の発展と向上が期待できると思われる。

(2) 指導計画、および指導体制、指導方法の視点から

関係諸機関の尽力により、ESD の浸透は実感できる。教職員の震災後の更なる業務多忙化や生徒の学習環境の悪化も影響し、積極的に教育活動を行い、また深めることの困難になっている。そのためか反面、ESD に対する理解不足・興味関心が希薄な教員職員もいることも事実であり、指導計画・指導体制・指導方法の発展と向上が足踏みしている要因になっていると思われる。

(3) 育てたい資質・能力に対する児童生徒の変容、評価の視点から

本校を例に挙げれば、校内だけでなく地域社会との係わりにより、目に見える成果が得られてきたと思われる。学校現場だけでなく、地域・自治体を巻き込んで、地域の来を担う子供たちをどのように育てたいのかという共通理解の場と一貫した教育指導体制が必要であると思われる。

今年度1年生のホームルーム活動において、NPO 法人の指導のもと、魅力ある地域についてグループ討議を行い互いの考えを深める機会をもった。少子高齢化が進行する中、地域の魅力を確認しながら、持続的な社会をどのように構築していくか、高校生として自らの問題としてとらえたが、そのような思いを具体的に取り組みにつながるためにも、地域の自然を科学的にとらえ、体験学習する場として理科巡検は貴重な学習機会である。また、社会福祉部の活動が多方面から評価を受けているが、これを全校的に波及させ、より多くの生徒が自主的にかつ日常的に行動できるようになることが望ましい。また、選択授業の食物の学習において、地元の食材や食文化について生徒が興味関心を深める指導も重視していきたい。